

# 玄洋社関係史料の紹介

## 石瀧 豊美 第7回

### 福岡表警聞懐旧談 (二)

前回に引き続き、明治六年佐賀の乱当時の福岡士族の動向が語られる。福岡士族は佐賀の乱に呼応する陰謀を隠して、大久保利通の募兵に応じ、福岡貫属隊を結成して三瀬峠へと出兵する。越知彦四郎がこの計画に積極的であったのに対し、消極的な武部小四郎は絶望して犬鳴山にこもったという。なお、この時戦死した幾島徳は安川敏一郎の次兄である。

(註) 翻刻に際し、句読点を付し、濁点を補い、適宜段落を設けた。本文中の( )は底本のままである。誤字、脱字その他、石瀧による註記は( )でくくった。同音の漢字を通用した場合に註記しなかった(例 壯志(壮士))。

明治丁丑 福岡表警聞懐旧談 上 清津野生編述 第一回 発端(続き) 夫等の兵ハ朝命を負ひて討手として差向ひしも、頗る隣好の情実あり。既に越

自ら覚醒して悔ること勿れと呼び、快々として其身は山谿の間に遁れ去れり。一時人を見ざりけり。頓て佐賀の乱取りたる後、越知彦四郎は久光忍太郎、舌間慎吾と共に熊本表に赴き、敬神党加屋栄太、阿部景器、富永守国等の一票に面接して九州聯合して政府へ建議し、以て征韓論を挽回す可き素志の在る所を告げしに、彼等は皆以て夫に同意を表す。夫れより鹿兒島表に到りて和田八之進、川端伊右エ門を訪ひて、又その談に及ぶ。此時、(島津)久光君は勅使之下向ありて上京中にありしなり。和田等の所論たるや、今日の処仮令ひ九州聯合を以て建議すればとて到底宿旨の貫徹す可き見込あるなし。依つて暫時く政府の施す儘を遵守するよりの外なしとの口氣にてありしなり。又其際、西郷、桐野等の議論は別に深き策略の存せしものなるか、言舌建議等は全く無用なり。無駄なり。殊に彼の挙兵等の如きは時機尚早し。尤も忌諱すべきものたり。然れども若し国家危急之秋に至りなば、我々は一死以て尽すあるべきとの意なるが如く推察せられけり。元来西郷、桐野等は維新の元勳、国家の柱石と景仰せられしことなれば、越知の一累も深くその論旨

の在る所に感服しつゝ、力めてその軽躁を制し、若し国家緩急の場合には、誓つて一死を俱にす可との心契を約して翌七年八月の中旬の頃まで鹿兒島表に滞在せしなり。

夫より福岡に帰りて后も、川越庸太郎、松本俊之助、内海重男を始めとして其他拾余名の少壮人物を選び遊学として差遣し、西郷、桐野、篠原等の紳士とは絶えずその音信を通脈せし事を知らる可きなり。之を要するに、佐賀県の乱後、我福岡士族全体に各自志を結合を保ち来りて、依りて以て他日事を為す可き準備を整ふ。その興望の帰する所は、一時その長を不破豊吉(旧名喜多村敏)、副長を越知彦四郎、郡利とし、参謀列には久光忍太郎、舌間慎吾、穂波半太郎等を推さ

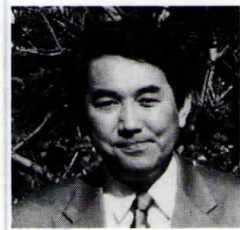
れ、各自手を別つて先づ以て土州、薩州、長州(前原の一累)へ之より行きて交渉すべきこと、なり。土州へは不破豊吉と郡利が推されしも、郡は宿病ありて之を辞す。その跡は福屋等が之に代る。不破、福屋は既に福岡を発途なせしも、何か事情ありて高知表迄達せざりし事実も存せしなり。又長州前原の一累に対しての交渉は穂波半太郎、同地に赴き試みし由なりしも、

穂波の所見と前原の宿説は旨趣抵牾して契合することを得ず。是又空しく帰る。踵で頭山満、箱田六輔等の一累が赴きて心契を結合なせしなり。薩州に至りては、初発より越知、舌間の一累が担任して盟誓を結合せしことを前に記せし如く知らる可し。その際、一方には一到社の組織なりて時事に

応じて代言社であり、始めの社長には尾崎謙、副長には郡利が推されしも、爾後、尾崎は辞し、郡は福岡県官に転じ、其他の一累権藤貞(貫)一、久世芳麿、吉田輛次郎、舌間慎吾、青柳豊徳、大庭弘、清原強助等は、福岡大工町森田喜平次が家屋を以て事務所として社事を継続しつゝ、其際東京に崛起せし島本仲道(土州人)が北国(洲)社なる(代言)に聯絡を通じ、権藤貞一を派出して交通せしめし事実も存せしなり。爾来渡辺県令は一到社に多数集合するを大に苦慮し、遂に夫れ夫れ離散策を取り、先づ武部を説くに陸軍の大尉位より心抱致しくれなば追々昇進さす可しとのこと立到に、はね付たりけり。又越知、久光をも県官に内命せしも同□等はね付けり。殊に同志内決するには、却て諸方に散在するは事をなすの便利ならんと、久世、権藤ハ郡長に、吉田は教員に、平

岡、村上は戸長に、青柳ハ試験を受け、一到舎を福岡橋口町に移し毎事集会所となしたり。

著者紹介 昭和二十四年福岡市柳原に生まれる。佐賀大学理工学部物理学科中退。筑紫野市史編さん室勤務。福岡教育大学講師(非常勤)。福岡県地域史研究所研究員。福岡地方史研究会・福岡部落史研究会・明治維新史学会に所属。近代政治史専攻。著書『玄洋社発掘』(西日本新聞社)。共著『筑前竹槍一揆論』福岡歴史探検(いづれも海鳥社)、他に『須恵町誌』『志免町誌』『粕屋町誌』など。



石瀧 豊美氏

### 玄洋社記念館 案内図

